

氏名(本籍)	なかのこうじの 中野幸次(東京都)				
学位の種類	博 士 (文 学)				
学位記番号	博 乙 第 847 号				
学位授与年月日	平成 5 年 3 月 25 日				
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当				
審査研究科	哲学・思想研究科				
学位論文題目	人倫と自然の形而上学				
主 査	筑波大学教授	文学博士	工 藤	喜 作	
副 査	筑波大学教授	文学博士	廣 川	洋 一	
副 査	筑波大学教授		野 町	啓	
副 査	筑波大学教授	文学博士	中 山	恒 夫	

論 文 の 要 旨

本論文は著者が多年古代ギリシア哲学に親炙して得た人倫と自然についての知見を基に、日本倫理・宗教思想を手がかりとして著者独自の思索を展開した研究成果である。

本論文は序、序説、本論より成る。「序」において著者は本論文の構想と原理を述べ、「序説」においてそのための方法論を論述する。また「本論」は次の 5 章より成る。I. 人倫と自然の前史、II. 人倫と自然の成立、III. 人倫と自然の発展、IV. 人倫と自然の形而上学、V. 無底真如と制作の哲学。

I. 「人倫と自然の前史」において、著者は先ず古代ギリシアの宇宙開闢説、ホメロス、オルペウス、ヘシオドスなどの世界像の中に人倫と自然の原始形態を探り、次いでヘシオドスに人倫の感覚とタレスに自然感覚を見出し、この両感覚が誰において合体するかを探索する。そのため、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの思想を巡り、これらの哲学者についての著者独自の見解を披瀝しつつ、この時代が著者の言う人倫と自然についての前史をなすものであると主張する。なぜここに「前史」であるかについて、著者はアリストテレス以前にはなるほど学の体系化はなされたが、まだ責任の問題、自由意志論、義務論、権限論などが現実的且つ本格的に論じられていないからであると主張する。つまり、これは人間の内なる世界の解明が残されていることを意味する。

II. 「人倫と自然の成立」において、著者が問題としたのはデモクリトス、シノペのジオゲネス、そしてエピクロスである。著者はデモクリトスにおいて魂の平静と不動を旨とする哲学があることを確かめ、ジオゲネス、エピクロスにおいてもっとも簡素で容易な道による自己充足の教え、さらに自由意志と自然とを基調とする宇宙市民の主張、学的な救済を求める「安らぎの哲学」のうちに

人倫と自然の結合を見出す。そしてここに人間的生命の必然性による自己と現実の発見が問題となり、そのために人倫と自然との結合の原理として空虚でいて、いっさいを包容する『荘子』の「氣」のようなものが考えられるのではないかと主張する。だがこの人倫と自然の結合の原理は著者によれば関係のそれではではなく、未だ両者の必然的結合を迎えるまでにいたっていないのである。

Ⅲ。「人倫と自然の発展」において著者はストア主義の幸福観について省察をめぐらす。ヘイマルメネー（自然の定め、万物の共通法則）を探り、それと必然（終わりなき原因系列の連鎖）との繋りを考察する。そしてエピクテトスのいう「われわれの力のもとにあるもの」に拠って宇宙における人間の位置について思索する。さらにまた本質はストア主義におけるアレテー（徳）とト・カテーコン（適切な行為）を人間における義務と責任に関連して論じる。次いで生命そのものへと考察をめぐらして、人間の自己保存の本能から人倫と自然の現身、あるべきはずの自己と現実の現身を「現存在」と命名し、その思想を日本の伝統文化のうちに求める。とりわけ井原西鶴の『日本永代蔵』のうちに、人倫と自然の母胎となる分限と制作の起源を見出し、その意味と存在と思想を著者自身の存在論の第一対象とする所以を説く。

Ⅳ。「人倫と自然の形而上学」において、著者は人倫の自然を倫理の必然と見なし、自然の人倫を天与の必然とする立場から、人倫と自然の交点と意味とを問う。ここで「一切虚空に入らずんば究極を得ず」を思索の形で徹底し、万物の包括者による現象と存在の統一形式を問題とする。そしてさらに「一切無底に入らずんば真如を得ず」において無底が現存在の存在であり、真如が存在者の存在であるとする。かくて無底において真如の光が示現し、無底と真如の合体したもの、つまり「無底真如」が究極存在者であると主張する。そしてこれが万象の究極として全存在を統一するものであることを明らかにする。

Ⅴ。「無底真如と制作の哲学」はⅢ。において問題となった「分限と制作の思想」の完結部を示す。「分限と制作の思想」は著者によれば無底良韶の分限からは無限が、無学祖元の分限からは真如が、哲学的分限からは無底真如がというように、それぞれの分限が生み出す主体の自己同一性であることを立証する。次いで無底真如を人倫の自然（生まれたものは作るものへ）と自然の人倫（作られたものは生むものへ）によって実証する。そしてこの無底真如において著者が当初目指した「人倫と自然の形而上学」と制作の哲学が不離となり、本論は完結される。かくて著者はその完結にいたるまでの体系的構造を反省し、この思想が著者のかつて親炙したギリシア哲学に導かれながらも、その思索の成果は日本文化の伝統に根差したものであることを確認する。

審 査 の 要 旨

著者は人倫と自然の結合が古代ギリシア哲学においていかになされたかを探って、ソクラテス以後の哲学からストア哲学にいたった。一貫した視点に立って古代ギリシア哲学を考察した点は評価できる。次いでこれを日本の伝統文化のうちに求め、西鶴の『日本永代蔵』に注目し、分限と制作の哲学の発想を得た。著者の独自性はその執拗とも言える強靱な思索によって分限と制作の哲学を

深化し、「無底真如」という究極的存在を見出し、それを「人倫と自然の形而上学」として体系化したことである。

だがこのような独自性があるにもかかわらず、本論文に不備な点がないわけではない。古代ギリシア哲学に言及する際、思想史のとらえ方、文献の引用、解釈、歴史的背景に対する顧慮等に注意を要する点が見られたこと。古代ギリシア思想から日本の伝統文化の考察に移るとき、両者の繋り具合に明確さが欲しかったこと。そして日本の伝統文化に対する取り扱い方にも一面的なものが見られたこと。西鶴からその発想を得た「分限と制作」がいかに関存在論の対象になるかについてもう少し説得力が欲しかった。

また著者の前述の執拗にして強靱な思索が裏目に出て、本論文全体を非常に読みにくいものにさせていること。さらにこれと関連して言えることは叙述の仕方にいささか論理性に欠けるものが散見されたことである。

以上のような不備が見られるにもかかわらず、本論文は全体として見れば、著者の独自の思索の成果として、関係学界に寄与する点少くないことが認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。